

【FD・SD ニュースレター】

2025 No.5

2026年
3月発行

FD・SD News Letter

教育研究推進センター長 ご挨拶

文教大学教職員の皆様方におかれましては、日頃より教育研究推進センターの活動にご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。

本センターでは、教育推進部門と研究推進部門が連携しながら、教育活動及び研究活動の一層の充実に向けて、FD・SD活動の推進、授業改善に資する各種アンケートの実施と活用、研究倫理教育の実施、研究支援体制の整備などに取り組んでまいりました。

教育面では、学生の学修成果を可視化し、組織的な授業改善につなげるため、授業アンケートを春学期・秋学期に実施し、その集計結果をもとに各学部でFD研修会が開催されました。本号では、各学部におけるFD活動の報告を掲載しております。また、さらなる教育改善を見据え、授業アンケートの見直しにも着手し、次年度以降の改善に向けた議論を進めているところです。第4期認証評価においては、学生の声を活かした教育改善の仕組みが、これまで以上に重要視されます。単にアンケートを実施するだけでなく、その結果を踏まえてカリキュラムや指導方法を改善する内部質保証の機能強化が求められています。さらに、学生生活調査についても継続的に実施し、学生の学修状況や大学生活に関する実態把握と教育改善への活用を図っております。次年度は、入学時から卒業時までの学修行動を分析するためのIR（インスティテューショナル・リサーチ）システムの構築に向けた検討も本格化させていく予定です。

研究面では、2025年度FD・SD研修会として、「研究データの管理・利活用について」をテーマにオンラインで開催いたしました。これに関連して、「文教大学研究データポリシー」及び「文教大学研究データポリシー解説」を策定し、



教育研究推進センター長 川合 康央

研究データの管理・公開・利活用に関する本学の方針を明確にすることができました。また、科学研究費をはじめとした競争的研究費の獲得に向けて、説明会や動画講座などによる支援を行うとともに、執行マニュアルの作成・公開や説明会の実施を通じて、研究支援体制の強化を図りました。さらに、教員から大学院生、学部学生まで、それぞれに応じた研究倫理教育の受講体制を整え、研究倫理への理解の深化に努めました。

本号は、学内で実施されたFD・SDの取組に関する情報を共有するものです。本ニュースレターが、各部局・学部・研究科における今後の教育改善及び研究推進の一助となれば幸いです。今後とも、教育研究推進センターの活動にご理解とご協力を賜りますよう、何卒よろしく願い申し上げます。

授業アンケートの活用

教育学部

2024年度秋学期授業アンケート結果を利用したFD 活動

(1) 2024年度秋学期における学生の学修時間・学修行動などを通じた教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果

今回のFD研修会の内容は2部に分かれ、第1部では2024年度秋学期授業アンケートにおける教育学部専門科目の結果を共有し、第2部では、2名の教員による授業実践例の報告を行った。

まず、第1部では、最初に本FD研修会の趣旨について共通理解を図った。すなわち、授業改善に関して大学が求められている取り組み2点として、①内部質保証による教育の充実と学習成果の向上、②学修時間・学修行動の組織的把握とその結果の授業等教育活動への活用があり、この2点の実現のために授業アンケートを各学期末に実施し、その結果をもとにしたFD研修会を毎年6月に実施していることを確認した。そして、2024年秋学期授業アンケートの個々の授業のアンケート結果については各教員に確認と検討を依頼し、本FD研修会では教育学部専門科目の結果を全学の結果と比較しながら検討した。アンケートの質問項目は17問あるが、重点的に検討することになっているQ5, 6, 7, 9, 10, 13, 14, 15について取り上げ、中でも特に検討することになっているQ5(学修時間)とQ7(学修行動)については詳しく検討を行った。まず初めに、回収率が26.1%と低いことを指摘し、回収率の向上が大きな課題であることを提起した。そして、全体的な傾向としては過去2年間と大きな相違がないことを確認し、重点項目の設問の結果を1年前の2023年度秋学期の結果と比較してグラフ化して共有した。Q5の学修時間に関しては、2023年度と比較するとやや減少傾向にあった。わずかな数値の差であるため誤差の範囲内とも言えるが、個々の授業の中で学生の学修時間の不足を感じられる場合は特に、学修時間を増加させる取り組みの必要性があることを提起した。また、Q7の学修行動については、「予習・復習」、「ICTで調べ学修」、「友人と協力」などの項目がやや減少傾向にあるのと同時に、「その他」が増加しており、学修行動の多様化が進んでいることを共有した。「その他」の具体的な内容については本アンケートで

はわからないため、個々の授業で学生の学修行動の把握が必要であることを提起した。

続いて第2部では、初等連携教育専修の藤森裕治先生と英語専修の中山夏恵先生から各15分程度で授業実践例の報告をしていただいた。藤森先生は「三つの地味なところがけ」と題して、①反転学習の実践例(2023年度「教科教材論」と2025年度「国語科教育」の授業)、②各授業での学生へのフィードバック、③毎週の教育通信の発行について発表された。また、中山先生は、「異文化理解概論」の授業で実践された2つのプロジェクト(ジグソー活動、英語絵本の読み聞かせ活動)について発表された。どちらのご発表も、学生が十分な時間をかけて主体的に学ぶ工夫にあふれており、アンケートの最重点項目であるQ5(学修時間)とQ7(学修行動)に関する授業改善のための多くのヒントを提供していただいた。今回は時間の制約上、質疑応答の時間を設けず、質問や感想、要望に関してはGoogleフォームで受け付けたが、両先生のご発表に対して「学生が主体的に学ぶための方法が具体的に示されて大変参考になった。」という趣旨の感想や、「次回も素晴らしい取り組みを紹介してほしい。」という趣旨の要望が寄せられた。

②次期に向けた課題

(授業方法の改善、教育課程の改善など)

前述したように、まずは、アンケートの回収率を上げる手立てが必要であると考えられる。アンケート実施時期に行っているセンターや主任からの声かけ以外にも、有効な手立てを模索する必要がある。また、要望として「(以前あった)自由記述欄を設けてほしい。学生からも自由記述がほしいという声を聞く。」という声があったので、センターで検討していただけないだろうか。

授業アンケートの活用

人間科学部

2024年度秋学期授業アンケート結果を利用したFD 活動

(1) 2024年度秋学期における学生の学修時間・学修行動などを通じた、教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果

アンケート結果については、事前に資料を配布し、参加者はそれに目を通した上でFD研修会に臨んだ。当日は、センター主任の岡田先生より以下の内容の説明を行った。

① 回収率

- 回収率は35.6%で2023年度(32.5%)、2022年度(28.9%)、2021年度(28.7%)から上昇している。
- 大学全体の回収率は26.1%で、人間科学部の回収率が最も高い。

② 項目ごとの検討結果

- 分析可能な項目:Q3,5,6,8,9,10,13,14,15,16,17
- 人科の2022,2023,2024年秋学期のデータによる経年比較。
- 2024年秋学期のデータによる全学平均との比較。
- 比較にはカイニ乗検定を用い、有意差があった項目には残差分析を行った

Q3 この授業を履修登録するうえでシラバスを参考にしましたか。

- 経年変化には有意差なし
- 全学との比較では有意差あり。本学部は5の比率が低く、4の比率が高い。

Q5 この授業のために平均すると授業1回あたりどの程度授業時間外に学修しましたか

- 経年変化に有意差あり。2時間、1時間は2024年は2022年よりも有意に減少、30分は有意に増加
- 1-2時間の比率は全学が高く、本学部は30分以下が有意に高い

Q6この授業での学修にどの程度意欲的に取り組みましたか。

- 経年変化に有意差なし

- 全学は5の比率が有意に高く、本学部は4が有意に高い

Q8シラバスにあるこの授業の到達目標を、あなたはどの程度達成できたと思いますか。

- 経年変化に有意差あり。4の比率は2022のみ低い。その他は2022が高い
- 全学は5の比率が有意に高く本学部は4, 3, 2が高い

Q9 学生が主体的に考える場面はどの程度ありましたか。

- 経年変化に有意差あり。2024年は5の比率が高く2023年は4, 3の比率が高い。
- 全学は5の比率が有意に高く、本学部は4, 3の比率が高い

Q10 学生同士が協働的に活動する場面はどの程度ありましたか。

- 経年変化に有意差あり。5の比率は2024年が高く3は2022年が高い。
- 全学は5の比率が高く、本学部は3, 4が高い

Q13この授業で、知識・スキルがどの程度得られましたか。

- 経年変化に有意差なし
- 全学のほうが5の比率が高い。

Q14この授業で、新しいものの見方・考え方がどの程度得られましたか。

- 経年変化に有意差あり。2023年の4の比率が高い。
- 全学は5の比率が高く、本学部は4が高い

Q15この授業で、学問や研究への興味・意欲がどの程度湧きましたか。

- 経年変化に有意差なし
- 全学のほうが5の比率が高い。

授業アンケートの活用

Q16この授業で、自身の人間形成がどの程度できましたか。

- 経年変化に有意差なし
- 全学のほうが5の比率が高い。

Q17全体としてこの授業を受けてよかったですか。

- 経年変化に有意差なし
- 全学のほうが5の比率が高い。本学部は3,4が有意に高い
- 5の比率は全学部で最低であった。

③ 分析結果のまとめ

人間科学部における3年間ではほとんど変化はないが、事前事後学習時間が減少する傾向(Q5)、シラバスにある到達目標の達成度の上昇傾向(Q8)、学生同士が協働的に活動する割合は上昇傾向(Q10)が有意であった。

全学との比較については、全項目で全学の5の比率のほうが高いことから、人科の授業評価は全学平均より低いことが推察される。その原因として、アンケートの回収率が群を抜いて高いことが影響した可能性が考えられたが、年々回収率が上がっているが評価には変化はほとんどないことから回収率は関係なさそうである。授業評価は低いのだろうか、

疑問は残る。いずれにせよ、授業のやり方について振り返る機会として捉えることは必要であろう。

昨年度も指摘されていたが、授業外学習時間が減少傾向であることは認識の必要がある。

(2) 次期に向けた課題

(授業方法の改善、教育課程の改善など)

- 授業外の学修時間が少ないことや、協働的な活動が少ないことについては、各授業での取り組みを共有していく必要がある。
- 満足度を中心に「5」評価が少ないことについては、まずその原因を探る必要がある。そのためにも、より細かなデータの提供、とくに授業規模別の集計結果の提供を教育研究推進センターに要望する。また、自由回答の復活やアンケートの選択肢の見直しについても要望する。

文学部

2024年度秋学期授業アンケート結果を利用したFD 活動

(1) 2024年度秋学期における学生の学修時間・学修行動などを通じた、教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果

【アンケート結果に関する考察】

アンケート結果については、重点項目を取り上げ、教育部門担当(日沖)より次のように説明した。

「Q5・授業時間あたりの授業外学修時間について」

5+4+3(1時間以上行っている)は49.0%で、回答者のおおむね半分が1時間以上の時間外学修に取り組んでいる。ただ、昨年度は50.7%、一昨年度は52.7%であり、年々下がっている。全体平均と文学部平均(区分平均)は同値なので、平均的な数値といえる。

「Q6・授業での学修に意欲的に取り組んだか」

5+4は87.3%で回答者の9割近くが、意欲的に取り組んだと回答している。昨年および一昨年とはほぼ同値である。区分平均は全体平均と同値なので、平均的な数値といえる。

「Q7・授業の理解を深めるために主体的に行った活動」

シラバスにも記載のある「予習・復習」に関連する活動が最も多く、「ICTを利用した調べ学修」と「友人と協力して学修」が次いで多い。昨年度は、「予習・復習に関連する活動」が40.7%(一昨年43.2%)、「ICTを利用した学修」が37.4%(一昨年36.5%)、「友人と協力して学修」は37.5%(一昨年36.4%)となっている。「予習・復習」については年々やや低下傾向がみられる。一方、「ICT利用」は昨年度に比べやや増加傾向が見られ、「友人と協力」もやや

授業アンケートの活用

増加傾向にある。また「教科書以外の関連書籍や論文を読んで学修した」は21.3%であり、2023年度20.4%、2022年度の22.3%と、「教科書以外の関連書籍や論文を読んで学修した」は21.3%であり、2023年度20.4%、2022年度の22.3%と、昨年度よりは増加しているものの、まだ2023年度に比べると低下傾向にある。文学部の学修においては文献の利用は必須であるが、学生の書籍離れが年々目立ってきていることは懸念される。

「Q9・学生が主体的に考える場面はありましたか」

「Q10・学生同士が協働的に活動する場面はありましたか」

「主体的に考える場面」については、5+4が85.3%であり、8割以上の学生が主体的に考えながら学修に取り組んでいる。「協働的に活動する場面」については、5+4が65.0%であり、6割以上の学生が協働して学修に取り組んでいる。区分平均は、全体平均と同じかやや高めとなっている。また授業内で主体的に考えているという自覚の高い学生が多く、大学の学修に対して明確な目的意識をもっている学生は多いと考えられる。一方、文学部では演習やグループ発表など、協働的な活動が必要な授業はあるが、全体としては平均的な数値に留まる。ただ、実験・グループ実習など協働的な活動を伴う授業の多い学部においても、必ずしも高値とはいえず、授業形式以外の要素(学生の人間関係等)に依るところもあると考えられる。

「Q13・知識やスキルがどの程度得られましたか」

5+4が91.6%となり、昨年度の89%、一昨年度の89.4%とやや増加傾向にある。9割以上の学生が「知識・スキルが得られた」と回答している。区分平均は全体平均よりやや高いが、平均的である。

「Q14・新しいものの見方、考え方がどの程度得られましたか」

5+4は89.0%となり、多くの学生が「新しいものの見方、考え方」を得られたと回答している。昨年は86.6%、一昨年は86.9%であり、増加傾向が認められる。区分平均は全体平均よりやや高いが、平均的である。

「Q15・学問や研究への興味、意欲がどの程度湧きましたか」

5+4は84.1%であり、8割以上の学生が学問・研究への興味・意欲を得られたと回答している。2023年度は82.7%、2022年度は83.5%でほぼ同値となる。「知識・スキル」「新しいものの見方・考え方」に比べるとやや低値だが、学年や科目によって差がつく項目であるといえる。「学修」から「学問・研究」への意識変化にもかかわるであろうし、学生が「学修」(「学習」との違いを含めて)をどのように認識しているか、という点にもかかわるものと考えられる。

【意見交換】

文学部の4学科より、各学科での状況をふまえ、主にQ5、Q7の項目について学科長からそれぞれ以下のコメントや課題が出された。

【日本語日本文学科】

Q5の授業時間外での学修時間について、シラバスに書いている時間、規則で定められた時間配分に比べると少ない点が気になった。だんだん学修時間の少なさが増加している傾向が見られる。より授業の予習・復習の時間を増やし、学生が意欲的に学修に取り組むような取り組みについて、フィードバックが増えるような工夫が必要であると考え。単位制限は予習・復習のための時間を十分に確保するための取り組みであり、意味のある単位制限となるように、授業者の働きかけも重要である。

【英米語英米文学科】

スコア的には問題なく、学生がよく努力していると感じる結果だった。Q7の3番目の項目に該当する、ICTでの調べ学修をしたという項目が37.0%となっており、全体の3分の1程度の学修状況という点が気になった。AIを含め、学生がPCやスマホをどのように学修のなかで活用しているかという点が気になる点である。諸外国のICTの学修の割合はもっと多いはずであり、日本はやや遅れているのではないかと感じた。この3番目のICTを活用した学修の数値がもう少し上がってくることが求められるのではないかと。

授業アンケートの活用

積極的に利用する流れを、授業を通じて作っていく方がよいだろう。

【中国語中国文学科】

当学科は、1年生で初めて中国語を学ぶという学生が多くを占めており、予習・復習が必須である。

Q5の授業時間外での学修は、上記のような現状を踏まえると、学年によっても学修時間に差が出るはずであり、できれば学年別の平均値を確認したいと感じた。Q9/10など、学生が主体的に考える、協同的学習が求められ、増加している昨今の状況を考えると、授業者から提供される資料に目を通す受け身の授業ではなく、いかに授業形式に工夫を加えていくか、改めて検討する必要性を感じた。

【外国語学科】

Q5の学修時間に関するアンケートについて、回答率（2024年度については、文学部の履修者8951名を対象とし、2423名から回答が得られたアンケート結果、回答率27.1%）を考えると、十分に実態を反映したアンケート結果とはいえないのではないかという懸念がある。回答者の傾向として、アンケートに回答してくれる意欲ある学生を対象とするアンケート結果の数値と考えるべきだろう。実際には、学習時間が0時間の学生や、主体的に取り組んでいない学生の数値は、今回のアンケートには反映されていない可能性が高く、そのことを考慮しておく必要がある。外国語学科で実施しているアンケートを集計すると、留学などの実体験を踏まえたアンケートでは、やはり満足度が高い回答が得られる。また、卒業研究についても非常に高い評価を得ている。中文科からも意見として提示されていたが、学年ごとなど、段階的に得ていくものという視点がわかるような（考えていけるような）集計結果だとよいと思う。コロナ禍の影響がどの程度あったかも、見えにくいので、そのあたりもわかりやすく示されるとよいと思う。来年度のFDの課題として、オンライン中心の学びと対面中心の学びとでどのような違い、影響があるかという点についても考えてみるとよいのではないだろうか。

（樋口先生）

大学における教育の基準、大学が学生の学修時間、行動

を把握できているかという基準の把握に努める機会となった。学科からの指摘にあったように、データの集計方法には課題が残るが、自身の講義のアンケート結果を見ながら、自省の機会ともなるとも改めて感じた。

（2）次期に向けた課題

（授業方法の改善、教育課程の改善など）

アンケート集計結果全体としては、多くの項目について4を超えている。文学部としては、学生との双方向の学び、学生同士が協働する学修などが達成できており、また授業から、学問・研究への意欲、スキル獲得が達成できたと考える学生も多いようだ。一方、「授業時間外での学修」には、課題が残る。学生の授業時間や取得単位数も多いことから、ただ授業外の学修時間を延ばすことだけに注力するのではなく、より効率的・効果的な学修方法や、授業中に集中して学修することも重視していくことも求められる。これには、授業の進め方や、教員からの働きかけも重要となるだろう。今年度もICTやAIの有効な活用についての指摘があった。ICTを活用した学修の数値をもう少し上げるために、どのような教育活動が可能であるか、今後は実際の授業例などに即して、具体的に検討する必要がある。また、FD全体を通して、今回の話し合いの内容が学部専任教員だけにとどまらず、非常勤も含めて関連する教員全体に共有される必要があるのではないか。専任・非常勤が場を共有する機会などを生かし、授業に関わる問題意識を共有していくことが求められる。また学修を、「教室の中だけの活動」「机の前での勉強」のように狭義に捉えてしまい、自主的な読書や文章作成、日常において外国語・文化に触れることなど、文学部の学修としての広範な取り組みをすでに行っているが、それを「学修」と認識する学生が意外と少ないと考えられる。こうした「学修」の認識を、教員と学生が共有することは、学問と日常、自分の生活や社会とのかかわりを認識しつつ学修を進めるためにも有効である。

授業アンケートの活用

りの努力を各教員に期待したい。

情報学部

2024年度秋学期授業アンケート結果を利用したFD活動

情報学部では下記の(1)と(2)を複合した意見交換を行った。

(1) 2024年度秋学期における学生の学修時間・学修行動などを通じた、教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果

(2) 次期に向けた課題

各学科の意見交換およびFD活動についての報告は下記のとおり。

【情報システム学科】

- 全体と学部との差異があまり見えないので、差分が見えるデータの提示をお願いしたい。
- 学科単位、オンラインと対面の比較のアンケートの情報がほしい。
- 生データを確認したい。
- 無作為抽出等の形でのデータを取得した方がよいのではないかと。
- 生データから分析をした方がよい。
- Q5の学習時間は、全体の学習時間よりも長い傾向がある。
- 昨年度と同様にICTを活用した学習の比率が高い。
- 複数選択項目(Q1, Q2, Q7, Q11, Q12)の提示方法を適切に変更した方がよい。
- Q11とQ12が同じ質問なのに分かれている。manaba(アンケートシステム)側の制約でアンケートの設問設定に制限がある状況が好ましくない。
- Q2:履修理由について情報学部は教員を理由とした科目選択の比率が高い。

【データサイエンス学科】

Q5:この授業のために、平均すると授業1回あたりどの程度授業時間外に学修しましたか？

- 学部の専門科目をひとつくりしているの、講義と演習の違いなどを検討する必要があるのではないかと。
- 授業時間外学修の内容(準備や課題対応)や時間配分

も明らかではないが、それらが授業理解のために必要であることを、シラバス以外でも伝える必要があるのではないかと。

- 学生の環境(通学時間など)も考慮して授業外の学修時間を考える必要があるのではないかと(湘南校舎はバスなどがあるため通学時間が長く学修にあてる時間が全体的に短くなってしまっているのでは)

Q7:この授業の内容の理解を深めるために、主体的に行ったことはありますか。

- 「教科書以外の関連書籍や論文を読んで学修した」「図書館やコンピュータ教室等の大学の施設を利用して学修した」の回答の割合が低いことが気になった。レポート作成などで書籍や論文等を参照することがないということであれば、学習として問題かと思うので、1年次の導入の授業などでの指導が必要かもしれない。
- 「パソコンやスマートフォンなどのICTを利用して学修した」が、比較的高い数値を示している。モバイルやリモート環境での学修が定着し、「校舎内で深く調べる」習慣が身につかなくなっている傾向が伺える。授業内容にもよるが授業を通じて学修方法を促すことも必要かと考える。
- Q10の「学生同士が協働的に活動する場面はどの程度ありましたか」に肯定した割合が59.0%に対して、Q7の「学内設備を使った」が12.6、「協働した」が34.9と数字が合っていない。学内設備についてはPC教室と図書館に限られていることが原因かもしれないので「学内で」と範囲を広げたり、「オンライン環境(ビデオ会議、SNS、メール等)を使って協働した」ことを聞いてもよいかもしれない。特に湘南校舎では学生の校内滞在時間が短いように見受けられるので、学外からオンラインでの協働の実態も聞くべきではないかと。
- ICTの調べ学修と比較して、書籍や論文の参照が少ない。対策として、図書館で授業の参考書の展示などを試してはどうか。

授業アンケートの活用

- ・「PCなどを使った調べ学習」をしている比率が平均より高いことは情報学部らしい傾向といえるかもしれない。

その他

- ・回答率が低いが、manaba（アンケートシステム）にアクセスしたけれども回答していないのか、アクセスしていないのか確認すべきではないか。
- ・回答率が低いが真面目な学生が回答している可能性があるのでは（つまり本当の結果はもっと悪い可能性がある）
- ・「この授業を受けて良かったですか」では「全くそう思わない」が46.5%という高い数字である。他学部も同様に高い数値であるが、改善のためにその理由を確認できればと思う。
- ・授業のよかった点の「オンライン授業の運営」の比率が高いことも情報学部の学生の特徴ではないか。

【メディア表現学科】

アンケートの結果から情報学部の学生は、授業の理解を深めるために積極的にパソコンやスマホを使って調べ学習を実行している割合が全学とくらべて12.7%も高いことがわかった。本FDでは自分たちの教育方法のなかがこのような好結果をもたらしているのかを考察することにした。

メディア表現学科でも教員は日常的にICTを積極的に使った授業を行なっているわけだが、とはいえ、他の教員がどのような教育実践をしているのかは、存外知らないものである。そこで、各教員から事例を報告することにした。それぞれの異なる方法論をお互いに知ることで、今後の学科全体の授業が一層充実したものとなることが期待できる。また、これらの事例を他学部でも参考にしていだけると文教大学総体としてのICT利用教育向上に資すると思われる。

ICTは知をネットワークとして捉えるツールとして有用で、さらに個別最適化ができる点に教育上のメリットがある。しかし、メディア表現学科の授業に通底していたのは、ツールとしての利用方法を伝授するだけでなく、ツールからもたらされる結果の評価とツール自体の限界性も射程

に入れていることである。学生自身が考え探究することなくツールの効率性だけに頼れば、機械に使われているだけになり、教育の根本である人を育てることから乖離するからである。

以下は、いくつかの具体的な事例である。

- ① 広告関連の授業で、生成AIを利用した広告企画と、学生自身だけで考えた企画を対比する。オリジナリティは、学生自身の企画に分がある。生成AIの利用の仕方と限界性を実体験として学習している。
- ② 法律関連の授業で、授業に関連する用語や情報を様々な検索ツールを使って検索結果を出し、それぞれの信頼度をメディアリテラシーの観点からチェックしていく。ICTから得られる言葉や情報の信頼度を、ICT自体を利用することで評価する学習である。
- ③ 1年次の基礎的な演習で、積極的にGoogleクラウドを使う練習を積ませている。コンピュータをスタンドアロンではなく集合知ネットワークとして捉える初歩的訓練をしている。
- ④ ソーシャルリスニング関連の授業で、wikiの編集履歴を分析し、ネットワーク上の集合知の構成過程を理解する実践をおこなっている。
- ⑤ 表現系の授業ではアドビCCを学生が縦横無礙に使っている。そのような指導ができるのは、20年ほど前からのマルチメディアに対応したパーソナルコンピュータが設置された教室があればこそで、それと同時に各種スタジオがあることで相乗的に、ICT教育の土壌を培ってきた。
- ⑥ ジャーナリズムの専門科目で、さまざまな情報の引用リテラシーを高めるために、ICTをつかって「ファクトチェック会」を授業の一環としておこなっている。ICTによって圧倒的に増えた玉石混淆の情報の中からファクトを判別する能力を鍛えている。
- ⑦ 英語教育を個別最適化するために、日本語で社会問題などをしっかりと考えた上でディープLを使い英語に翻訳し、英語でスピーチをさせる。このことで、英語力が向上するのはもちろんだが、日本語での内容が薄ければICTツールをつかっても、英語スピーチとしては、質が低いことも体験できる。

授業アンケートの活用

- ⑧プレミアなどの映像制作ソフトなどは、大学入学時までの経験により学生のレベルが大きく異なる。そのため、教育レベル設定が難しかった。しかし、コロナ禍の時期を乗り越えるためにソフト操作方法を動画化したことで、動画を見る回数で各学生にとって個別最適化の指導ができるようになり、学生総体のレベルアップと学生満足度が大幅に向上した。
- ⑨授業中、講義を続けるためには学生の知識が足りな

いことがある。キーワードを学生に伝え、その場でwiki、グーグル、AIなどで調べさせる。とくに、歴史的ことがらについて、高校で選択しなかったことを免罪符にしている学生が目立つ。復習課題として、キーワードを提示し、検索窓に入れるように指示することも多い。

健康栄養学部

2024年度秋学期授業アンケート結果を利用したFD活動

1. はじめに

2024年度秋学期に実施された授業アンケートの内容をもとに、各教員がまとめた授業改善に向けたふり返りや取り組み、さらには今後の課題を整理し報告する。また、各教員のFD報告をもとに、学生の学修行動、学修成果、授業満足度などを総合的に分析し、教育の質向上に資する提言を以下の通りまとめた。

2. FD実施方法

- 自身の授業アンケート結果と全体集計結果を確認をする期間を設け、検討し、回答シートを提出した。
- 紙媒体と学内サーバ上で回答シートを一定期間回覧する。閲覧した後に事務室のファイルに捺印することでFDの参加確認とした。

3. 各質問項目のまとめ

1) 授業外学修時間(Q5)

多くの科目で「1時間程度」が最多回答であり、講義科目では学修時間が不足する傾向が見られた。一方、実習・演習科目では「2時間以上」の回答もあり、比較的長めの学修時間が確保されていた。

2) 主体的な学修行動(Q7)

予習・復習が最多であり、友人との協働やICT活用(manaba、Zoom録画など)も一定数見られた。グループ学習が有効に機能している科目もあり、学修意欲の向上に寄与していると考えられる。

3) 学修成果(Q13~15)

知識・スキルの獲得(Q13)は多くの科目で80~90%が肯定的な回答であった。新しい見方・考え方(Q14)は60~80%、学問・研究への興味・意欲(Q15)はやや低め(50~70%)の傾向。ゼミ・実習形式の授業ではQ15の評価が高いという特徴が得られた。

4. 今後の課題と改善提案

1) 学修時間の確保

講義科目において学修時間が不足している傾向が見られる。これに対して、事前課題(例:manaba上での確認テスト)、授業内での小テスト、授業後の振り返り課題を導入することで、学修時間の確保を促すことが可能。また、動画教材の活用においては、視聴率向上のために要点を絞った編集(例:10分以内の短編動画)や視聴確認テストの併用が有効と考えられる。

2) 探究心の育成

Q15の回答傾向から、学問的興味・意欲の伸び悩みが見られる。これに対して、そもそも興味の対象となる情報を知らないという可能性が高いので、文献調査やエビデンス提示を伴う課題(例:テーマに関する論文の参照やレポート作成)を導入することで、探究的な姿勢を育成することに繋がるかもしれない。また、実務との接続を意識した授業設計(例:栄養指導の模擬演習や、実習に向けた事前調査やふり返り)も有効である。

授業アンケートの活用

3) 協働学習の支援

友人との協働が多く見られる一方で、実習・実験などグループワークやレポートにおいて、役割分担の不明確さや不公平感が課題となる場合がある。学生が主体となって、グループワークにおける「分担表」を作成するなどにより、協働の質を高める取り組みも必要と考えられる。また、オンデマンド授業などにおいては、manabaやTeamsなどのICTツールを活用した協働支援やその指導を進めることで、将来のキャリアにおいてもそのスキルを生かせるようにしていきたい。

4) アンケートの質と量の向上

一部の科目ではアンケート回収率が20～30%台と低く、学生全体の傾向を把握するには限界がある。これに対して、授業内での回答時間の確保（例：授業終了5分前にmanabaで回答を促す）など、回収率向上に向けた工夫が求められる。

また、設問内容については、科目の特性に応じた調整が必要である。たとえば、実習科目では技能習得に関する設問を追加することで、より実態に即した評価が可能となる。さらに、特定の設問に対して記述欄を設けたり、学生の自由意見を収集する記述項目を追加することで、授業内容や方法、環境に対する学生の率直な声を拾い上げることができる。こうした工夫により、アンケートが単なる形式的な評価にとどまらず、授業の質的改善や教育支援に直結する有効なツールとして機能することが期待される。

5. おわりに

本報告書で示された傾向と課題は、今後の授業改善に向けた重要な指針となる。特に、学修時間の確保、主体性の促進、探究心の育成を柱に、各教科における授業内容の充実化と支援体制の強化が求められる。引き続き、FD活動を通じて教育の質向上に努めていきたい。

国際学部

2024年度秋学期授業アンケート結果を利用したFD活動

(1) 2024年度秋学期における学生の学修時間・学修行動などを通じた、教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換

冒頭に、国際学部教育研究推進委員の杉山先生より、今回のFD研修会の開催目的、ならびに、アンケートの集計結果について説明（概説）があった。

目的(1)：「2024年度秋学期授業改善のためのアンケート」から、国際学部の専門科目に関するQ5（授業1回あたり授業時間外の学修時間）とQ7（授業内容の理解を深めるために主体的に行ったこと）の2つに焦点を合わせて、質疑応答と議論を行う

目的(2)：アンケート結果を用いてその確認と議論を行うことにより、国際学部としてこの結果を組織的に把握し、授業など教育活動の見直しの一助にする。

Q5（授業1回あたり授業時間外の学修時間）について

- 大人数クラスの場合、授業時間外の学修を想定した宿題の出し方全般に難しさを感じる。

- 大人数クラスでは、課題の提出方法に工夫が求められる
- 同様に、コメントの返し方についても大人数ゆえの課題がある（例：時間がかかる、全員へのコメントができない、要約や抜粋による学生の意見の紹介が適切か）

Q7（授業内容の理解を深めるために主体的に行ったこと）について

- 今後、参照するデバイスに変化が生じたり、AIの利用がますます進んだりする可能性がある
- AI利用を前提とした講義や課題、レポート、試験の方法も検討の余地がある
- Q7の選択肢にも、こうしたデバイスや手段を加えてはどうか（当然、加えていく必要がある）

(2) 次期に向けた課題

（授業方法の改善、教育課程の改善など）

- アンケート全体に、学生の取り組みを見る問いが多い（ほとんど）

授業アンケートの活用

- 教員の教育成果や改善にかんする質問項目はほとんどないので、反省が難しい
- 現アンケートには、学生たちが授業に何を、どのように求めているかを分析・評価するのが難しい
- 教員も、アンケート結果をどのように授業にいかし、どのように履修者に改善が伝わり、実際に授業の質が高まっているかがわかりにくく、結果の判断が難しい
- 上記をふまえ、アンケートそのものに改善の余地があるのではないか

経営学部

2024年度秋学期授業アンケート結果を利用したFD 活動

(1) 2024年度秋学期における学生の学修時間・学修行動などを通じた、教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果

事前にアンケートの結果を各教員に配信し、各自分析・考察した上で参加し、運営委員からアンケート結果の時系列比較分析の説明を聞いた後、学部として取り組むべき課題と対策について意見交換した。

2024年秋学期の集計値は、全体的に全学平均値と同じか少し高い値を示していて比較的に良いと考えられた。その内容を具体的にみると、

Q5(授業1回当たり平均どの程度授業時間外の学修をしたか)の質問では、「2時間以上・14.8%」「1時間30分程度・13.6%」、平均値3.0(全学平均値2.7、点数は、2時間以上・”5”、1時間30分程度・”4”、1時間程度・”3”、30分程度・”2”、0時間・”1”に換算して計算。)と回答した。

Q6(学修にどの程度意欲的に取り組んだか)の質問では、「非常に取り組んだ・48.3%」「やや取り組んだ・37.5%」、平均値4.3(全学平均値4.2)と回答して、85.8%の学生達が(非常に+やや)意欲的に取り組んでいた。Q7の授業内容の理解を深めるために主体的に行ったことがあるか(複数回答可)の質問においては、①「予習・復習や関連する活動に取り組んだ」の項目について46.7%の学生達が主体的に取り組んだと回答した(全学平均値40.2%)。Q9(学生が主体的に考える場面はどの程度あったか)の質問では、「非常にあった・55.2%」「ややあった・27.0%」、平均値4.3(全学平均値4.2)と回答した。Q10(学生同士が協働的に活動する場面はどの程度あったか)の質問では、「非常にあった・39.7%」「ややあった・25.3%」、平均値3.7(全学平均値3.6)と回答した。Q13(知識・スキルがどの程度得られたか)の質問では、「非常に・48.1%」「やや・37.3%」、

平均値・4.3(全学平均値4.2)と回答した。そして、Q14(新しいものの見方・考え方がどの程度得られたか)の質問と、Q15(学問や研究への興味・意欲がどの程度湧いたか)の質問に対しては、平均値が全学平均値と同じ水準で、それぞれ”4.2”と”4.0”であった。

しかしながら、Q7の授業内容の理解を深めるために主体的に行ったことがあるか(複数回答可)の質問の場合、②「教科書以外の関連書籍や論文を読んで学修したか」の項目は、12.6%(全学平均値17.2%)、③「パソコンやスマートフォンなどのICTを利用し学習したか」の項目は、39.1%(全学平均値41.4%)、④「図書館やPC教室等の大学施設を利用し学習したか」の項目は、10.2%(全学平均値12.4%)に止まり、全学平均値より低く、前年よりも低い数値となった。このことは、昨年のFD研修会で取り上げられた改善策が不十分であったと考えられて、継続努力することとした。

(2) 次期に向けた課題

(授業方法の改善、教育課程の改善など)

「担任制度とゼミ指導教授を活用した教員間の情報交換とそれに基づいた学生指導」と「学生と教員間のコミュニケーションの活性化」を積極的に進めたことが、学生達の学業状況をいち早く把握できて適切に個別指導できるようにし、学生達の学修に良い影響を与えたと考えられる。そして、「主体的に友人と協力しながら学修した」項目の場合、36.2%となり全学平均値40.3%よりは若干低い前年30.1%から36.2%へと伸びていたため、「授業に取り組む姿勢を強調する」とともに「グループスタディや課題を積極的に課す」という取り組みはそれなりに有意義であったと考えられる。

しかし、全体的にさらに改善する余地があり、「主体的に

授業アンケートの活用

教科書以外の関連書籍や論文を読んで学修した」、「主体的に図書館やPC教室などの大学施設の利用し学修した」については、まだまだ低くより一層改善策を講じる必要があり、経営学部の課題として取り上げた。

それで、今後の改善策として、「教員間の情報交換」、「学生と教員間のコミュニケーションの活性化」などを継続しながら、「学生達に”授業に取り組む姿勢”や”学ぶ楽しさ”について反復説明する」とともに、各授業において「関連書籍を積極的に紹介する」、「課題を積極的に課す」、「グループスタディ活動をもっと積極的に活用する」などが

取り上げられた。

なおかつ、アンケート調査の回答率の低さが大きな課題であると再度確認された。今回の回答率は前年同期よりも低く、経営学部の状況を正しく把握するためにも回答率をもっと上げる必要があり、回答方法や回答期限などについて授業中にしっかり伝えることとした。そして、授業の最後に回答時間を設けるなどして学生達の負担を軽減させる案も提案されたが、その実行は各教員の判断に委ねることとした。

本学におけるFD・SD（2025年度）

開催時期	内容	主催
4月5日	新任教員研修	学長室
4月22日	ハラスメント防止について(アカデミックハラスメントを中心として)	情報学部メディア表現学科
6月	2024年度秋学期授業アンケート結果を利用したFD活動	各学部
9月～11月	大学におけるハラスメント防止研修	ハラスメント防止委員会
10月29日	研究データの管理・利活用について	教育研究推進センター
11月19日	キャンパスハラスメントの防止のために～行為者にも被害者にもならないために～	人間科学研究科
12月17日	大学院早期修了課程及び長期修了課程に関する事例報告	人間科学研究科
12月17日	「効果的な調査方法などについて」	人間科学部
12月10日	修士論文審査基準のルーブリック作成の方向性について	教育学研究科
12月24日	第4期認証評価の概要について	点検・評価委員会
1月21日	「キャリアWGの進捗報告ー調査の分析結果とこれまでの議論を踏まえてー」	人間科学部
2月13日	就職活動の現状と今後の学生支援について	就職委員会・キャリア支援部
2月18日	情報学研究科の特色を踏まえた質保証の検討	情報学研究科
2月18日	学位授与方針を踏まえたルーブリック評価実践報告会	言語文化研究科
3月6日	学位授与方針を踏まえたルーブリック評価実践報告会	文学部
3月18日	生成AIと考える力を育てる教育	国際学部 国際学研究科

本学におけるFD・SD(2025年度)

事務職員を対象とした主な研修

開催時期	内容	主催
4月～6月	新任職員研修:学園の歴史、各部局の基本的な内容、ビジネスマナー、ITスキルほか	文教大学学園
4月下旬	新任管理職研修および考課研修	
4月～翌年3月	日本私立大学連盟オンデマンド研修	日本私立大学連盟
5月～11月	採用2年目研修: <社会人基礎スキル> ビジネスマナー研修(発展) <ITスキル> Microsoft Office社の各ソフトを実践利用ほか <文教職員共通スキル> 教育関連法令、教務事務基礎ほか	文教大学学園ほか
5月～10月	採用3年目研修: <社会人基礎スキル> タイムマネジメント研修、ビジネスデータ分析研修ほか <文教職員共通スキル> 学校法人会計、私学助成ほか	文教大学学園ほか
6月～10月	係長実践研修	外部研修
6月～10月	課長実践研修	外部研修
6月～11月	採用5年目研修: <社会人基礎スキル> 課題形成力養成研修(外部研修) <文教職員共通スキル> 学園人事制度ほか	外部研修 文教大学学園ほか
7月～8月	入試アドバイザー研修	入試部
7月～12月	採用7年目研修:ビジネスコーチング	外部研修
7月4日	採用8年目研修:チームビルディング	外部研修
8月20日	管理職研修: 情報セキュリティ研修、Excelソフト・アプリ研修ほか	文教大学学園
8月21日	一般職研修: 情報セキュリティ研修、Excelソフト・アプリ研修ほか	文教大学学園
対象者と個別調整	労務管理基礎研修: 労働法、タイムマネジメント、メンタルヘルスほか	外部研修
12月4日	採用10年目研修:キャリアの振り返りほか	文教大学学園
2026年1月～2月	【学園BCP】危機管理マニュアル 周知訓練の実施について	経営企画室